

昔の記録と青い玉

——中條／宮本百合子「津軽の虫の巢」論

池田啓悟

はじめに

「津軽の虫の巢」は『日米時報』の一九一九年六月二一日と二八日に掲載されているのを浦西和彦氏によつて発見された。^①本作を初めて収録した『宮本百合子全集』解題によると、一九一八年七月三十一日執筆の原稿用紙七枚分の「津軽の虫の巢」が存在し、『日米時報』版はこれに加筆したものでろう、という。^②なお、百合子の資料は現在、日本近代文学館に寄託され、誰でも閲覧することが可能になった。^③「津軽の虫の巢」の下書き七枚と関連するメモ一枚の計八枚も直接確認することが出来る。

一九一八年というと、百合子はアイヌ取材のため五月七日から札幌を訪れていた。その成果は「風に乗って来るコロポックル」(全集解題によると七月一六日完成)としてまとめられたことが知られていたが、下書きの書かれた時期からも分かるように、この「津軽の虫の巢」もまた、アイヌ取材の副産物ともいべき作品なのである。直接アイヌが出てくるわけではないが、この作品は同時期に書かれた「風に乗って来るコロポックル」、および新版『宮本百合子全集二〇巻』に初め

て収録された「遙かなる彼方」と、内容に直接的な繋がりはないものの、関連性が非常に高い。本稿では、「津軽の虫の巢」がアイヌを描いた作品群とどのように関わるのかを明らかにしたい。

作品は秋晴れの津軽の海を描くところから始まっている。その海を「二艘の大船」が姿を現し、それが「十代津軽矩広」を乗せた「長者丸、貞松丸」であると語られ、物語の舞台が江戸時代であることが明かされる。参勤交代から藩主が戻ると、「津軽の藩中」は江戸の、特に元禄期に花開いた様々な文化の話でもちきりになる。が、そのうち話題は「生類憐愍の令」が中心になっていく。そして「津軽の虫の巢」と呼ばれる宝玉が、本当に虫の巢なのか吟味されることになる、というのが大まかなあらすじだ。自身の体験をベースにすることの多い百合子には珍しい、「昔の記録」を元に肉付けした、どこか芥川龍之介を思わせる作品となっている。

だが、百合子はこの作品で不思議な間違いをしているように見える。「歴代の津軽公は、参勤交代で江戸表への上下には、必らずこの二艘の手船で、津軽の海を超える慣例になっている」というのだが、「津軽公」が江戸に向かうのに、「津軽の海を超える」必要があるだろうか。作中で「十代津軽矩広」とされている人物は、歴史的にみると「松

前矩広」である。歴代津軽藩主の中に「矩広」の名前はなく、松前氏の五代目藩主が「矩広」で、一六六五年から一七二〇年まで藩主をつとめており、元禄期（一六八八—一七〇四）を舞台とした作中の時期とも一致する。なお、矩広は松前氏としては「五代目」だが、松前を名乗る前の蛎崎氏をあわせると「十代目」になるため、「十代藩主」と表記されることもあった。

つまり、百合子は「津軽藩（弘前藩）」と「松前藩」を間違えたように見えるのだ。実際、この作品は三章からなるが、二章までは「津軽の城中」とあるのに、三章では「松前の藩中」とある。「津軽藩」と「松前藩」を間違えた、というより「津軽藩」と「松前藩」を混同しているように見える、といった方がいかもしれない。

不思議なのは、今回確認できた七枚の下書き版では、こうした混同は見られず、一貫して松前の出来事として書かれているのだ（ただし、下書き版にも一ヶ所おかしいところがある）。とすると、『日米時報』に掲載する際、加筆するなかで間違いが発生したことになるのだろうか。下書き版から現行版へ加筆された箇所を確認し、その点を明らかにしていきたい。

また、すでに森勇二による指摘があるが、この作品はいくつかの古文書を元に書かれている。⁴ 今回の調査で森氏の指摘をより深めることが出来たので、その点についても述べたい。

以上の作業を通じて、百合子が「風に乗って来るコロポックル」「津軽の虫の巣」「遙かなる彼方」と立て続けに作品を執筆するなかで自身の作風を模索していた様子を明らかにしたい。

一、津軽と松前——下書き版との比較

現行の「津軽の虫の巣」が四〇〇字詰め原稿用紙十三枚であるのに対し、下書き版「津軽の蟲の巣」は七枚、半分ほどである。下書き版の始まりは次のようになっている。

長者丸・貞松丸と云ふ吉例の二艘の手船が

江戸表から歸國した。十代矩廣を乗せて、松前の港に入った。

まず現行版にある海の描写や、「秋晴れ」という季節に関する情報がなく、松前藩主矩広の帰国から始まっている。下書き版は全体的に、虫の巣玉が燃やされるまでのストーリーが淡々と進むので、現行版に比べると「プロット」や「あらすじ」に近い印象を受ける。大森寿恵子は「小品」と呼んでいるが、⁵ 現行版が「小説」や「物語」を思わせるのに対し、確かに下書き版は「小品」や「随筆」を思わせるものがある。

さらに、ここでは「十代矩廣」となっており、帰る場所も「松前の港」となっている。現行版が「十代津軽矩広」と「津軽」を補い、「津軽公」と書いているのに対し、下書き版は歴史的事実とも一致する。

下書き版はこの後狼煙の描写に移っていく。これは多少の字句の違いなどはあるが、現行版とほぼ同じ内容である。下書き版の該当箇所を引用しよう。

海上無事を知らせる合図の簞が、白上峠で夕暮の空に華々しく燃え始めると、其に應へる「清八」の狼煙が仄かに三馬屋の泊から

立ち昇る。美くしい火の應答が、碧い津軽の海を隔て、取り換えられる間に、大々しい行列は「威儀堂々」と上の奥の城に繰込むのである。

現行版・下書き版ともにあるこの狼煙の描写は、森勇二が指摘するように、最上徳内『蝦夷草紙』の「狼煙の事」を参照したと思われる箇所である。と同時に、ここが先に指摘した下書き版にも存在するおかしいところになる。まず、『蝦夷草紙』を引用しよう。

狼煙の事

一、松前の領主東都へ参勤の時、松前と津軽の灘を渡海の節、定例にて長者丸、貞松丸〔別本貞祥丸に作る〕といふ手船二艘にて、松前の泊を開帆して津軽三馬屋の泊に渡り至る。海上無事に著〔着〕岸すれば、津軽領の宇鐵村清八といふ獵師の定役として狼煙をあげ、海上無事に著〔着〕岸ありたる其しるしを、松前へ告知らしむるあひづなり。松前の白上〔別本に白神に作る〕にて此の狼煙を見て、主人つゝ、がなく三馬屋に著〔着〕岸ありたるを知て、白上にても相図の篝をたく。此かゝりを見て、松前城中にても又篝をたく也。宇鐵、白上、城中と三ヶ所の火を通して後宇鐵の火の消るを見て、白上と城中ともに皆火を消すなり。此狼煙は松前と津軽と隣国の好みによつて也。津軽の領主にもかねて用意ある事也。松前領主よりは獵師清八に青差二貫文褒美として給はる也。⁷⁾

「津軽の虫の巢」と『蝦夷草紙』の記述を比べてみると、行き帰りが逆になっていることが分かる。下書き版でいうと、「矩廣」は江戸か

ら松前の港に戻っている。一方、最上徳内『蝦夷草紙』の場合は「松前」から「津軽」に渡り、「江戸（東都）」へと向かっている。

『蝦夷草紙』の方は狼煙の意味がはっきりしている。「松前の領主」が「松前の泊」から海を渡って「津軽三馬屋」に着いたとき、津軽領の獵師「清八」が狼煙を上げて、藩主の無事を松前藩の残りのものに伝え、松前藩の者は白上から狼煙を上げてこれに応える。「清八」の狼煙は藩主が無事本州に渡ったことを、蝦夷松前藩の者に伝えるためのものなのである。

一方下書き版の方は、「矩廣」が「松前の港」に無事着いたことを、白上峠から三馬屋の泊にいる「清八」にわざわざ知らせているのだが、それが一体何のためなのかわからない。

ここからは推測になるが、本来は松前から江戸に向かう藩主の無事を知らせるこの狼煙は、江戸から帰国することで物語が動き出す「津軽の虫の巢」では必要ないものだったはずだ。だが、百合子は『蝦夷草紙』で知ったこの狼煙の場面を、事実を曲げてでも取り入れたかったのではないか。下書き版はそうように推測できる。とすると、これは間違いというより、書きたいもののために現実を改変して作品に取り込んだと言えるだろうか。

一方現行版は、三馬屋の泊（津軽）から松前の港へと移動するこの場面を大幅に取り込みながら、移動する先を「津軽の城中」に変更した。さらに作品の最後には「松前の藩中」と出てくる。

下書き版にはっきり「松前の港」と出て来るのに、それを書き写したと思われる作品で津軽と勘違いしたとは考えにくい。もしかしたら百合子は、作品の舞台を意図して津軽に書きかえようとしたのかもしれない。その場合、作品末尾の「松前の藩中」という方が直し忘れたということになるだろう。

あくまで仮説ではあるが、津軽と松前の混同という不可解な間違いに見えるものは、下書き段階での意図的な事実の改変、現行版への改変、さらに偶発的なミスが幾重にも重なった結果生じているのかもしれない。ではなぜ現行版では津軽へ改変したか。この点については後にあらためて論じたいが、その前にもうひとつ、百合子が参照した古文書の確認をしておきたい。

二、「蝦夷談筆記」と「蝦夷抄略記」

現行版の最後には「昔の記録」として次の文章が載せられている。

青玉の事

カラト嶋の方、北高麗より渡り申す由なり。蝦夷地には無之候。津軽の虫の巢等と申せども、なかなか此地よりも出不申候。中略。先年松前にて色々吟味あり、練物の相見え申せども何にて拵へ申候や相知れ不申候。

評議の上にてために焼きて見申候へば、砕け候へど色はなか／＼少しも変り不申候。虫の巢など申伝へ候は偽に有之候。云々。

これについて森勇二は、「若干の差異はあるものの」「百合子の「青玉の事」は、『蝦夷談筆記』を下敷きに行っていることは疑いない」として、北海道大学付属図書館所蔵の『蝦夷談筆記』を引用している。

「青玉の事。からくと島の方、北高麗より渡り候由承伝候。松前にて色々吟味いたし候得共、ねり物と相見候得ども、何にて拵候

や不相知候。焼候て見候所、砕候得共、色は変は不申候。虫の巢と申伝候は證拠無之事。

常憲院様御代、吟味仕候而、虫の巢に無之に極り、献上被仰付候由也。」^⑨

確かによく似ているのだが、この資料と百合子の引用したものとでは、「若干」におさまらない、作品の根幹に関わる差異が存在する。次の引用を見てほしい。

青玉ノ豆 ●（売？売？）太嶋ノ方高麗ヨリ渡申候由蝦夷地ニハ無之候津軽ノ虫ノ巢ナト、申セ ●（共？）中々自此地出不申候外ノ石玉ハ大方津軽ナトニテモ浜辺ニ見事成目馴ヌ石モ自然ト打寄セ有之候ヲ拾取緒メニモ仕候ヲ津軽石ト呼ヒ申候也青玉ハ中々津軽松前両地ニ無之候先年松前ニテ色々吟味子リ物ト相見え候へ ●（共？）何ニテ拵候や相知不申候故様シニ焼見候へハ砕候へ ●（共？）色ハ少モ替不申候虫ノ巢ト申傳候ハ偽ニテ候 常憲院様御代御吟味委有之虫ノ巢ニ無之ニ極此節献上ニモ究り候不案内ノ人ハ青玉ヲ于今虫ノ巢ト呼申候^⑩

引用したのは北海道大学付属図書館所蔵の『蝦夷抄略記』である。傍線を引いたが、ここに「津軽ノ虫ノ巢」とある。これが作品のタイトルになっているわけだが、森の引用した資料には「虫の巢」とはあるが、「津軽ノ」とは書かれていないのである。

後回しになったが、資料の説明をしておこう。『蝦夷談筆記』は一七一〇年、幕府巡見使で軍学者の北條新左衛門に従った弟子の松宮観山が、「恐らく一行の案内として加わったと思われる蝦夷通詞勘右衛

門の談話を筆記したものである。上下巻に分かれ、下巻にはシャクシャインの乱について書かれている。書名が最初から『蝦夷談話記』であったかは疑問とされ、観山の著述目録には「北游筆記」の名が見えるという^⑪。一方の『蝦夷抄略記』は『蝦夷談筆記』の上巻を書き写したものとされている。しかし、見ての通り、骨子は同じだが、分量が二倍ほどに増えている。それはなぜか。

『蝦夷談筆記』の異本・類本の検討を行った榎森進は、「一般に「蝦夷談筆記」と称される書は、色々な題名で伝えられてはいるものの、系統的には大まかにみて、(一)の「蝦夷筆談記」系のものと、(二)の「蝦夷記」系のものとの二系統のものがあった」と指摘している。そして「(一)系統の書は、本来的な写本というよりは、もはや異本に近いものといえる」とし、市立函館図書館蔵の「蝦夷抄略記」を「蝦夷記」系に位置づけている^⑫。百合子が参考にしたのも、榎森の言う(二)の「蝦夷記」系のものだったのだろう。

ただ、百合子が参照した古文書について、もう一ヶ所気になるところがある。現行版には次の一節が出てくる。

しかし、鞆の下地に使う「さび皮」まで、馬の皮ならば紙で下着せを仰せつけるほどの厳しさは、決して物を風流では許さない。

実はこれとよく似た一節が、静岡県立中央図書館所蔵の『蝦夷談聞記』(『蝦夷談筆記』の異本)に見られる。

大小の目貫縁の模様迄も生類の躰黒鞆のさび皮も是らの皮なれば紙にて鞆の下着仰付られ候^⑬(略)

なおかつ、この一文は、先に見た『蝦夷談筆記』と『蝦夷抄略記』には見られないものである。つまり、榎森は「蝦夷筆談記」系のものと「蝦夷記」系のものに分類したが、「青玉の事」の記述に関して言えば、「蝦夷記」系のものはさらに「さび皮」についての記述があるものとないうものに分けられる。

そうすると百合子は「蝦夷記」系の「さび皮」についての記述があるものを参照したことになるのだが、実は下書き版には「さび皮」についての言及がなく、これは現行版で書き足された内容なのだ。下書き版に言及があるのであれば、「蝦夷記」系の「さび皮」についての記述があるものを元に書いたという話ですむが、下書き版になく、現行版にあるということであれば、百合子は「さび皮」について後から知った可能性も出てくる。ここで一度、下書き版と現行版の違いを整理しておこう。

三、下書き版から現行版へ

現行版は三つの章から成っているが、さらに細かく見ていくと①十代矩広帰城の場面、②元禄文化などの江戸の風聞、③生類憐愍の令の噂、④津軽の虫の巢の話、⑤虫の巢吟味の場面、⑥語り手による昔の記録の紹介、の六つのパートに分けることが出来る。

下書き版には章分けがなく、①十代矩広帰城の場面から始まり、元禄文化への言及は無く、すぐに②生類憐愍の令——下書き版では「生類御法度」となっている——の話が始まる。それから③津軽の虫の巢の話、④虫の巢吟味の場面、⑤語り手による昔の記録の紹介と続く。こうしてみると一番大きな変化は元禄文化への言及だが、それぞれのパートもかなり加筆されている。例えば冒頭の場面の違いは前章で触

れたが、他にも③生類憐愍の令の噂については処罰の例が増えた上に具体化しているし、⑤虫の巢吟味の場面では吟味に関わった人々の心理についての言及が増えている。

さて、これらの変化のうち、生類憐愍の令に関する処罰の例はどうやら齋藤隆三『近世世相史』（博文館、一九〇九年四月八日）を参照したようだ。まず下書き版の該当箇所を引用しよう。

お江戸の何●（處？）某●（處？）のお士の 門前に犬の死骸が捨て、在った許りに、其●（處？）は「解」（かいえき）に成つたとか、畜類御法度の基を開かせた坊さんは、何でも高麗あたりからの諜者（まわしもの）で、大和の國を乱しに來たのださうだ、とそのやうな事が、尤らしく人々の心を動かして居る時に、何処からともなく、「津軽の蟲の巢」の御吟味があると云う噂が立つた。

見ての通り、抽象的な例が一つ挙げられているだけである。これに対し現行版は猫の例と釣りの例が挙げられているが、「自分の怪俄で死んだ小猫一匹のために、歴とした武家一族が、八丈嶋へ遠嶋」については、完全に一致しないが、『近世世相史』に「即ち貞享四年二月には、台所頭天野某なるもの、庖所の井中に猫の落ちて死したるを救はざりし故もて八丈島に遠流に処せられ」（三三八頁）という記述がみられる。また、「江戸の小鼓では押しも押されぬ一代の名人観世九郎が、鬱晴らしについ何心なく羽田の沖に釣糸を垂れたばかりに、不愍にも船頭もろとも欠所遠嶋仰せつけられた」については、「同七年（引用者注——元禄七年）小鼓の名家観世新九郎羽根田沖に釣せし故を以て船頭共に缺所遠流となる」（三三八—三三九頁）と、「観世九郎」と「観世新九郎」という違いはあるものの、かなり近い記述がみられる。それから、

下書き版では「畜類御法度」「生類御法度」となっているのが現行版では「生類憐愍の令」「生類憐愍の令」となっており、これも『近世世相史』で「生類憐愍の令」とされているのに合わせたのだろう¹⁴。いうことは、元禄文化への言及も、この本を参照した可能性は高いだろう。

百合子は一九一八年五月七日から北海道を訪れていた。その後、自筆年譜によると「八月に父が札幌へ用事で来て、一緒に帰る汽車の中でアメリカへ出かけるがついてこないか、と言った。行く気になった。九月二十六日東京を出発した」という¹⁵。そして現行版が書かれた一九一九年六月には「ニューヨーク近くの避暑地レーク・ジョージ」にいた¹⁶。

そうすると、八月に東京に戻って九月にアメリカに出発するまでの間か、アメリカで資料を取り寄せるなどして直したかのどちらかだろう。その点で気になる資料が帝国図書館（現国立国会図書館）所蔵の『元文世説雑録』である。これは「享保末年より元文年間における、各地の異聞雑説を輯録したもの」¹⁷であり、卷之十五、十六は『蝦夷談筆記』を書き写したもののだが、その元となった資料が「蝦夷記」系の「さび皮」についての記述があるものだったようで、次のような言及がある。

大小の目貫、縁の模様までも生類の躰、黒鞘のさび皮も是等の皮なれば、紙にて鞘の下着せ被「仰付」¹⁸（略）

とすると、東京に戻り、渡米までの短い期間で、生類憐愍の令や元禄文化について調べる中でこの資料に出会った可能性があるのではないだろうか。

四、青い玉——虫の巢玉と津軽石

さて、ここまで百合子が参照したのは、「蝦夷筆談記」系のものではなく、「蝦夷記」系のものであったと主張してきた。もちろん両方の資料を参照した可能性もあるが、ベースとなったのは「蝦夷記」系の資料である。そこにこだわったのは、そもそも「津軽の虫の巢」というものが、「蝦夷記」系の資料の中にしか存在しないのではないか、という疑いがあるからである。

まず、「虫の巢玉」というものは存在する。ガラス玉の一種で、「浅葱玉の表面に制作する時の気泡が穴となつて表面に所々残つたものを一名「蟲の巢玉」と呼ぶ¹⁹⁾」そうだ。作中では「津軽の」と呼んでいるが、実際にはアイヌの人々が交易品として手に入れていたものだった。アイヌには「タマサイ」という首飾りがある。「タマサイ」というのは「玉を連ねたもの」を意味し、ガラス玉などの「アイヌ玉」が使われた²⁰⁾。アイヌの人々はこのガラス玉を「専らサハリン島（樺太）や本州との交易によつて異民族から」入手していたという²¹⁾。こうした交易の一部は「サンタン（山丹）交易」と呼ばれる。

文化人類学者の佐々木史郎によると、「サンタン交易」とは、一八世紀から一九世紀にかけての時代に、我が国から見て北方の地域、すなわち今日のアムール川下流域と樺太（サハリン）を舞台に盛んに行なわれていた交易活動である²²⁾という。交易の中心は絹と毛皮だったようだが、アイヌ玉も「一八世紀中頃までは樺太経由の希少な「山丹玉」が主体であり、それを連ねたタマサイは威信財であったと考えられる²³⁾」そうだ。

前述の通り、気泡で出来た穴が虫の巢のように見えるためそう呼ば

れているのだが、かつては本当に虫の巢穴だと思われていたようで、例えば作中に登場する松前矩広（一六六〇—一七二二）と同時代人の伊藤東厓（一六七〇—一七三六）の『輜軒小録』（ゆうけんしょうろく）には「東北辺地蝦夷のあたりより来る虫の巢と云ふ青き玉あり。海中に有りて、小虫宿り居る巢なりと云ふ」とある²⁴⁾。さらに、もつと後の世代の平秩東作（へづつとうさく、一七二六—一七八九）の『東游記』には「世にねり物也と云は知らざる者の云事也」という記述があり、「ねり物」であるという説も知られてはいたようだが、否定されている²⁵⁾。

しかし、「一八世紀末以降、本州でアイヌ向けのガラス玉の生産が本格化する」ようになる²⁶⁾。「蝦夷錦や山丹服は幕府への献上品、あるいは諸侯への贈答品として松前藩の存在をアピールするためにも使われた²⁷⁾」が、当初はそうした献上品のなかに「虫の巢玉（青玉）」もあったのだろう。だが、やがて本州や「復領後の松前でもアイヌ向けの青玉が作られるようにな」る²⁸⁾。当初は希少な財としてアイヌから買い上げていた虫の巢玉だが、「恰好の対アイヌ交易品²⁹⁾」として和人の手で製造されるようになっていったのだ。さらに、

一八世紀後半以降、北方への関心が高まるにつれ、アイヌ絵や木工品をはじめとする蝦夷細工物など、蝦夷地やアイヌを想起させる品物が和人向けに作られるようになった。また蝦夷錦、アツトゥシ（厚司）、ガラス玉などもアイヌ文化を象徴する土産物や贈答品として和人社会に流入するようになった。こうして和人社会に「逆輸入」されたガラス玉のほとんどは青玉である。和人にとつて青玉こそがアイヌ玉であり、最も「異域」「異民族」をイメージさせる玉であった³⁰⁾。

というように、皮肉なことに本州や松前で和人の手によって作られた「青玉」が、「アイヌ」あるいは「蝦夷」という「異域」「異民族」を象徴するものとして、和人社会の中に流通するようになっていったのだ。

こうして、最初アイヌの人々がサンタン人と交易することで入手していた虫の巣玉（青玉）は、やがて対アイヌ交易用に本州や松前の和人の手で作られるようになり、さらにアイヌを象徴するものとして、本州の人々に受容されるようになっていったのである。

このように、虫の巣玉（青玉）はアイヌや異域としての蝦夷を象徴するものだったが、それがなぜ「津軽の虫の巣」というように、「津軽」と結びつけられているのだろうか。実はそれを読み解くヒントが、下書き版にはある。ほとんどの場合、現行版の方が下書き版より加筆され長くなっているのだが、「青玉の事」に関する「古い記録」の部分だけは下書き版の方が長い。現行版では「中略」とされているところに次の文章が書かれている。

外の石玉は大方津軽などに 浜辺に見慣れる見事なる石も自然と打寄せて有之候を、拾ひとり候て緒メめにも仕（立）候をすべて津軽石と呼び候也。

青玉は、なか／＼一向に津軽松前両地に無之事に候。

ここに出てくる「津軽石」というのは、「津軽玉」「錦石」とも呼ばれ、青森県立郷土館学芸課長の島口天によると、「磨いて美しい光沢を示す珪酸質の岩石・鉱物」が「今別石や津軽石、津軽玉、津軽瑪瑙、撃壊石、吾妻石、錦石」などと呼ばれていた。島口はこれらの名称を整理し、津軽半島北部海岸一帯で採れる美しい石を県外の人々は「津軽石」と呼び、そのような石を「磨いて玉にし、緒締などに加工した

製品を津軽玉といった」としている⁽³¹⁾。

このように、「虫の巣（虫の巣玉）」はガラス玉、津軽石は天然の石（津軽玉はそれを加工したもの）、というように両者は別のもののだが、両方とも緒締などに使用されたため、それらが混同され、結果「津軽の虫の巣」と呼ばれるようになったのではないか。本稿ではそのような仮説を立てたい。

五. 何を書き、何を書かないか

前章で確認したように、作品的内容的には直接関わっているように見えなくても、虫の巣玉そのものはアイヌと深いかかわりがあった。百合子が狼煙の場面を書く際に、最上徳内『蝦夷草紙』を参照したことは先に述べたが、同じ最上徳内の『蝦夷草紙 後編』には次のような記述がある。

クシユンナイより山韃への渡り場、ノテトといふ所迄百里餘の間、蝦夷住居は二三ヶ所のみにて、其他皆山韃へ借金に連行きけり。人家絶たる所もあり、初て此事を聞て皆落涙したり。蝦夷錦は美しきものなりとて、紙入に拵ひ、青玉を風鎮にいたし、愛玩すれども、顧れば蝦夷の身を異国へ売したる代金なり。実に体の塊なり。山韃へ取られたる蝦夷の女房や子供は、錦、青玉は、親の身に夫々の敵よと歎き哀れめども、借金をせめられ返すべきやうもなければ、據なく一生の別れをして異国へ囚はれ、又残りたる妻子は草の根を堀りて喰ひ、あぢきなき命をながらひても、生きて甲斐なき風情なり。是皆松前にて催促して、錦、青玉を上げる故なり。⁽³²⁾

「蝦夷」（アイヌの事）が借金のかたに買われていくのは、松前藩がアイヌに蝦夷錦、青玉を催促して、アイヌがそれらを手に入れるために「山韃人」に借金をしているからだ、と最上徳内は告発している。百合子はこれを知らなかったのだろうか。もし知っていたら、「愛すべき昔の記録者」とは書かなかったようにも思える（なお、「愛すべき昔の記録者」としたのは現行版への修正のときであり、下書き版では単に「記録者」となっている。この点についてはまた後で論じたい）。

この問題に関して参照したいのが、同時期に書かれた「風に乗って来るコロポックル」をめぐる議論である。この作品について、中島堅二郎は「十九歳の少女が果敢にもアイヌ民族問題に取りくんだことは賞賛されなければならない」としつつも、百合子が「北海道旧土人保護法」との対決という視点を持つことができなかった、「弱小民族と侵略的支配者との関係」を見る目を自分でふさいでしまった、「北海道旧土人保護法」のはたしている役割が、文字通り「保護」という側面からしか受けとめられていなかったのではないか」と指摘した。

これに対して、松本新は「作品世界では、同法にかかわるようなことがらが一言も述べられていないにもかかわらず、若き日の百合子は作家的直感によってまぎれもなく、同法が内包していた矛盾から目を逸らしてはいなかった」と反論した。さらに格清久美子は、

（略）百合子は、中島のいうように、「北海道旧土人保護法」がもたらした現実を無視して「風に乗って来るコロポックル」を構想したように見える。しかし、実際は、この作品には時代設定を知ることがほとんどなく、（略）物語は過去の出来事が中心であり、作品が書かれた一九一八年は、物語が語られた時代には重なり、物語内世界の時代を意味するわけではないのである。この

ように考えると、この作品が「北海道旧土人保護法」以後の時代を想定しているという根拠も不明確で、イレнкаトムが広大な土地財産を所有していることも、豊がその土地を自由に売却することも、それほど不自然な設定とはいえなくなるのではないだろうか。

と指摘した。⁽³⁵⁾ 格清の、そもそもこの作品は「北海道旧土人保護法」以後の時代を想定していないのではないか、という指摘は十分に説得力があるように思う。

中島は、アイヌ民族問題に取り組むには「北海道旧土人保護法」に触れざるを得ない、しかしこの作品はそこに触れていない、それは問題だ、というように論をすすめているように思うが、その前提として、中島がこの文章を書いた一九九四年には「風に乗って来たコロポックル」がアイヌを描いた唯一の百合子作品だと思われていた、という背景がある。

だがその後、二〇〇二年に刊行された新しい『宮本百合子全集 第二十巻』には「遙かなる彼方」という、バチェラー・八重子がモデルの主人公・雪子を描いた未完の長編が初めて収録された。

つまり百合子は、アイヌ取材から生れた三つの作品、「風に乗って来るコロポックル」「津軽の虫の巣」「遙かなる彼方」を様々な作風で書き分けていたようなのだ。「風に乗って来るコロポックル」について、中島・松本・格清はいずれも、この作品が「北海道旧土人保護法」に触れていないことについては意見が一致しており、ただそれをどう解釈するかで対立していた。「風に乗って来るコロポックル」だけがアイヌ取材の唯一の成果だと思われていたときには、そこに「北海道旧土人保護法」が描かれていないことは「対立を避けた」ともみなされた

わけだが、実際には、「北海道旧土人保護法」が真正面から関わってくる一九一八年当時の問題は、別の作品で書こうとしていたわけである。

一九一八年一月、百合子は弟の死に際の記録である「一つの芽生」、自分の精神史ともいえる「地は饒なり」、物語風の「三郎爺」と、作風の異なる三つの作品を描いている。大森寿恵子は、「貧しき人々の群」「欄干様宮田」のような作品を書きあげた百合子の次に書いたものが、「一つの芽生」「地は饒なり」であることに、読者である私たちにはすぐうなずけないものがある」といい、「百合子のような作家でさえも、その成長には多くの紆余曲折」があつたと指摘しているが、この時期の百合子は、様々な作風を試していたのではないだろうか。

六、「語り」の変化

そうした「紆余曲折」の中で、百合子は「津軽の虫の巢」を完成させるにあたって、芥川龍之介を参照した可能性がある。先に、この作品がどこか芥川を思わせるものがあると書いたが、実は一九一八年の下書き版の段階ではそこまででもない。例えば、虫の巢玉を吟味する場面は下書き版では次のようになっている。

が、如何にも分らない。列●の者は、後の責任が恐ろしいから、誰も断言する者はない。非常に丁重な平伏と、礼儀正しい言葉を以て分かりません●と●述べる。

このように、淡々と状況と心理を述べているのみである。現行版にあるような「彼等武士の一言という者は、直に懸ってその生命に在る」

とか、「僅かな自信はとうてい後難を慮る責任感を減ずるだけの力はない」と言った文言はない。それから虫の巢玉が燃え尽きた後の描写も、下書き版では、

漸々拾ひ上げるやうに細くなつて●、まだ瑠璃色に変わりなく光つて居る小玉の●●を、殿様の御前に捧げて、蛎崎某は平伏した。

というように、家老蛎崎某の心理は描かれない。これが現行版では、散りながら、なお依然として大空を照り返す、華麗なるりの小珠を白扇の上に搔き集め蛎崎某は、優雅な哀愁に胸を鎖されながら矩広の御前に平伏した。

というように、その胸にぎざした「優雅な哀愁」についての言及がある。最後に、昔の記録について言及する場面で、下書き版は次のようになっている。

此の青玉は支那で、青琅玕（セイロウカン）と呼んで居ること等は、其時●の松前で知る者はなかつた。

其時の事を記録者は、斯う書いて居る。

見ての通り、事実を淡々と書き記すのみである。これが現行版では次のようになっている。

当時松前の藩中には、この珠を支那で青琅玕（せいろうかん）と呼ぶのを知る者が無かったのであろうか？

このときの結果を、愛すべき昔の記録者はこう書いている。

「知る者はなかつた」という断定は、「知る者が無かつたのであろうか？」という疑問へと変っている。つまり、すべてを知る絶対的な超越者から、ある限られた知識を持つ語り手へと変貌している。そしてその語り手は「昔の記録者」を「愛すべき」と呼び、自分の感情を吐露する。言いかえると、感情を持つ存在として描かれている。

先に自身の体験をベースにすることの多い百合子にとって、このような「昔の記録」を元に肉付けした作品は珍しいと指摘した。それに付け加えて言うと、百合子の三人称小説で、語り手が作中人物と一体化する形ではなく、語り手自身がこのように知識と感情を持って実体化した存在として描かれることも珍しい。

また、どこか芥川を思わせるとも書いたが、実際、百合子は一九一八年一月下旬か一九一九年一月初めころの執筆と推定されている「無題(三)」とされている文章で、芥川龍之介「邪宗門」の断片を異国の地で読んだ感動を語っており、「津軽の虫の巣」初出には末尾に一九一九年六月の日付けがある。「邪宗門」を読んだ後に完成した可能性が高い原稿なのである。

もっとも、芥川の語りについて、例えば田中実「芥川の小説の主眼は登場人物どうしの対立(ドラマ)であるより、そうした人物を(語り手)がどのように捉え、批評していくのかに特徴がある」と指摘しているが、百合子の語り「小説の主眼」と呼べるほどのものではなかった(そもそも、下書きの段階では批評めいたものが存在しない)。この作品が下書き版から一貫して描いているのは、人間の様々な都合で燃やされる津軽の虫の巣であり、それによって生じる「優雅な哀愁」といった感情である。

終りに——優雅な哀愁を越えて

「風に乗って来るコロポックル」に「北海道旧土人保護法」を書かなかったように、様々な点でアイヌと関連の深い虫の巣玉を扱った作品「津軽の虫の巣」でアイヌに一切触れなかった。作品の舞台が松前から津軽に変えられようとしたのは、このことと関連しているのかもしれない。

その一方で、当時のアイヌ問題に真正面からぶつからざるを得ない「遥かなる彼方」を同時期の百合子は書いていた。この作品に次のような場面がある。アイヌの二郎が指に怪我をし、悪化させ、D博士が病院に連れていった。それを聞いたD博士の養女でアイヌの雪子は、D博士に治療費は誰が出すのかと聞いた。D博士は「誰も出してやる者がいないだろうから、私が出してやりましょう」と答える。それに続く場面である。

そうでなくても、若し二郎の、引いては彼の総ての仲間の名誉を少しでも高めようと思つたら、何故、たった一言、
彼が払うでしょう

と云つて呉れなかつたらう、
勿論、深い同情に依つて、病院へまで入れて貰つた上、其まで望むのは、我儘ではあるうけれども、けれども——

「貧しき人々の群」で百合子は、あくまで与える側から作品を書いた。ところが「遥かなる彼方」では与えるということが、与えられる側にとってどのような意味を持つか、に焦点が当てられている。当然、こ

れはD博士と雪子の個人的な問題にとどまらないだろう。

「遥かなる彼方」を完成させることなくアメリカに旅立った百合子は、後に『伸子』の中で、

勝気な母の多計代のひそかな大望の偶像にされそうなところがあつたり、中流家庭の娘として、伸子が望むだけどしどし人生に突入することを許さない掣肘があつた。このままでは、自分が半分も生きるだけ生きていない。生活が未だ始まっていないという意識が、少くとも過去三年彼女を苦しめつづけて来ていた。⁴⁰

と書くことになる。「遥かなる彼方」の中で雪子を感じていた生きづらさは、百合子その人のものでもあつただろう。アイヌの人々が置かれた境遇と、自身をリンクした作品を彼女は書こうとしていたのだ。その後、『伸子』で自身の生きづらさを作品化した百合子は、やがて自分の生きづらさと社会をリンクさせるようにプロレタリア作家の道へ進んでゆく。一九一八年のアイヌ取材を経て、百合子は「風に乗って来るコロポックル」「津軽の虫の巣」「遥かなる彼方」と作風の異なる三つの作品を生み出したが、最終的に進んだのは未完成に終わった「遥かなる彼方」の方向だった。このように、百合子が自分の行く道を模索するなかで書かれた「津軽の虫の巣」は、アイヌ取材の成果として唯一公表された作品であつた。だがそれは、作品を完成させることで、このような作風に別れを告げることを意味していた。彼女は「優雅な哀愁」を火鉢に投げ捨てるようにして、我が道を行くことになる。

注

(1) 浦西和彦「宮本百合子全集逸文について」『国文学』五三号、一九七六年一二

月、四〇―五七頁。後、『浦西和彦著述と書誌 第一巻 新・日本プロレタリア文学の研究』和泉書院、二〇〇九年一月三〇日に収録。

(2) 『宮本百合子全集 第一巻』新日本出版社、一九七九年四月二〇日、四四四―四四五頁。

(3) 「多喜二・百合子の資料 日本近代文学館に寄託」『しんぶん赤旗電子版』二〇二四年六月二〇日。

(4) 森勇二「百合子と虫の巣」『北海道史研究協議会会報』九六号、二〇一五年六月一五日、十一―十四頁。

(5) 大森寿恵子「早春の巣立ち 若き日の宮本百合子」新日本出版社、一九七七年一月三〇日、一八九頁。

(6) 前掲、森勇二「百合子と虫の巣」、十四頁。

(7) 最上徳内『蝦夷草紙』、引用は大友喜作編『北門叢書 第一冊』（北光書房、一九四三年九月二〇日）によった。なお、引用文中の（着）は引用者による。また、山形大学附属博物館の『古文書近世史料目録 第十一号』（一九七八年七月）によると、最上徳内の『蝦夷草紙』は「昭和十八年の半ば頃、刊本となって世に出るまでは、写本で伝えられ」ていたという。一九一八年にこれを書いた百合子は、どこかで写本を確認したことになる。

(8) 前掲、森勇二「百合子と虫の巣」、二十一―二十三頁。

(9) 前掲、森勇二「百合子と虫の巣」、十二頁。これは孫引きということになるが、今回は論旨の都合上森のあげている資料が重要なので、あえてこうしている。

(10) 『蝦夷抄略記』（北海道大学附属図書館所蔵） 出典：国書データベース、<https://doi.org/10.20730/100348707> 閲覧日二〇二五年九月一日。傍線は引用者による。●は判読できなかった文字で、(?)をつけて推測した文字を書いている。以下の資料も同じ。

(11) 以上の記述は『日本庶民生活史料集成 第四巻 探検・紀行・地誌 北辺篇』（三一書房、一九六九年六月三〇日）の「解題」による。

(12) 榎森進「増補改訂 北海道近世史の研究」北海道出版企画センター、一九九七年四月二八日、一四九頁。

(13) 『蝦夷談聞記』（静岡県立中央図書館所蔵） 出典：国書データベース、<https://doi.org/10.20730/10078942>

(14) 斎藤隆三『近世世相史』博文館、一九〇九年四月、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dlndi.go.jp/pid/772715>（参照二〇二五―〇九―〇二）

(15) 宮本百合子「年譜」『宮本百合子全集 第十八巻』新日本出版社、二〇二二年四月三〇日、一〇一頁。

- (16) 大森寿恵子作製「年譜」『宮本百合子全集 別冊』新日本出版社、二〇〇四年一月二五日、一八頁。
- (17) 小出昌洋「解題」『続日本随筆大成 別巻 近世風俗見聞集1』吉川弘文館、一九八一年一〇月三〇日、七頁。
- (18) 引用は前掲『続日本随筆大成 別巻 近世風俗見聞集1』、二八六頁によった。
- (19) 杉山寿榮男『アイヌたま』今井呉服店（今井札幌支店）、一九三六年十二月一〇日、引用は北海道出版企画センターによる復刻版（一九七四年七月一日）、二八頁。
- (20) 池谷和信編『アイヌのビーズ 美と祈りの二万年』平凡社、二〇二二年三月三一日。
- (21) 関根達人「第五章 玉がつなぐアイヌと和人」、前掲『アイヌのビーズ 美と祈りの二万年』、一一〇頁。
- (22) 佐々木史郎『北方から来た交易民 絹と毛皮とサンタン人』NHKブックス、一九九六年六月二五日、十二頁。
- (23) 前掲、関根達人、一一一頁。
- (24) 引用は日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期 第十二巻、日本随筆大成刊行会、一九二九年五月一〇日、六九一頁、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dlndi.go.jp/pid/1226665>（参照 2025-09-03）によった。
- (25) 引用は大友喜作編『北門叢書 第二冊』北光書房、一九四三年十一月二〇日。
- (26) 前掲、関根、一一一頁。
- (27) 前掲、佐々木史郎、一八一―一八二頁。
- (28) 前掲、関根、一二一頁。なお、松前藩は一八〇七年に転封され、一八二一年に復讐が許された。「復讐後」というのはこれ以降を指す。青玉吟味よりおよそ一〇〇年後のことである。
- (29) 前掲、関根、一一五頁。
- (30) 前掲、関根、一一八一―一九九頁。
- (31) 島口天「江戸く明治時代における錦石に関連した石の名称」『青森県立郷土館研究紀要』第四五号、二〇二一年三月、四五―四八頁。
- (32) 引用は大友喜作編『北門叢書 第三冊』北光書房、一九四四年二月十二日、四六二―四六三頁。
- (33) 中島堅二郎「百合子とアイヌ2」『新日本文学』四九巻四号、一九九四年四月、五五頁、五三頁、五四頁。

- (34) 松本新「風に乗って来るコロポックル」と「北海道旧土人保護法」——中島堅二郎「宮本百合子とアイヌ」批判』『日本文学』四〇〇号、一九九九年二月、二〇三頁。
- (35) 格清久美子「未発表作品「風に乗って来るコロポックル」——百合子とアイヌ民族——」岩淵宏子・北田幸恵・沼沢和子編『宮本百合子の時空』翰林書房、二〇〇一年六月二〇日、一三三―一三四頁。
- (36) 前掲、大森、一七九―一八〇頁。
- (37) 宮本百合子「無題（三）」『宮本百合子全集』新日本出版社、二〇〇二年七月三〇日、二〇三頁。「河原蓬と云う歌めいた響や、邪宗の僧、摩利信乃法師と云う、如何にも古めかしい呼名が、芥川氏一流の魅力を持って、私の想像を遠い幾百年かの昔に運び去ると同時に、私の心には、又何とも云えないほど、故国の薫りが高まって来た。／人から借りた新聞の小さい切抜きを両手に持って、私は何という熱心さで読んで行つた事だろう！／遠い海を越えて送られて来た新聞は、「邪宗門」の僅か二三章を齎したに過ぎない。／けれども、私は、今殆ど歓喜に近い興奮で、「縦に並ぶ」自分の言葉を、此の懐かしい碁盤目の紙に書き付けて居る」という記述がみられる。ちなみに、「邪宗門」で「河原蓬」が出て来るのは二一・二二・二五章のみである。百合子が読んだのはこのあたりの章だろう。
- (38) 田中実「批評する〈語り手〉」『小説の力 新しい作品論のために』大修館書店、一九九六年二月二〇日、三九頁。
- (39) 宮本百合子「遙かなる彼方」『宮本百合子全集 第二十巻』新日本出版社、二〇〇二年七月三〇日、九二頁。
- (40) 宮本百合子「伸子」『宮本百合子全集 第三巻』新日本出版社、二〇〇一年二月二五日、三八頁。

付記

作品の引用は『宮本百合子全集 第一巻』（新日本出版社、二〇〇〇年一月）により、いずれもルビ等は適宜省略した。また「津軽の蟲の巣」の下書きについては、個人蔵・日本近代文学館寄託資料を利用した。論文への利用等をご承諾いただいたことに感謝申し上げます。

（本学非常勤講師）